
change • life

CACAONOVEL12

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

change・life

【Nコード】

N5942W

【作者名】

CACAO NOVEL12

【あらすじ】

席次1番、運動神経抜群、通信簿オール5の満点美少女・桐嶋愛きりしま あ
蝶げは、超快樂ドあほの転校生・葛城海斗かつらぎ かいと
、愛蝶を取り巻く仲間たち……。
「友情なんて 幻」という孤独な考えをもつ愛蝶が、傷つきながら
も恋、友情を学ぶ青春ストーリー！。

私の愚痴

人はめんどくさい。

自分の言いたいことをがまんして言わず、周りの顔色ばかり伺い、騙し、騙され、偽りの友情を深めていく。

人は残酷だ。

自分さえよければいい、友達のふりして、最後は手のひら返して笑
い者にする。

だから私は一人を選んだ。

嘘はつきたくない。

傷つけたくない。

傷つきたくない。

友達なんていらない。

友情なんて幻だ。

騒がしい教室で、私は一人、机に参考書をひろげる。

皆自分らの置かれた状況を理解してない。

明後日は中間テスト。

中三のくせして、勉強している気配が全く感じられない。

将来のことは、考えてないみたい。

（馬鹿じゃないの？）

でも注意なんかしない。

だってこいつらの未来心配してられる余裕なんかない。

私の予想では、ここにいるやつらの80%は就職難民になる。

（ふん、ざまあみろ！）

私は中一の頃から席次はずっと1番。

体育は満点。

通信簿は毎回オール5。

誰もが認める満点女子だ。

そのせいか、周りは私を遠巻きにしている。

こんなやつらと一緒になったら、馬鹿がうつる。
嫌いだ。

ガラッ。

派手な音を立ててドアが開いた。

私の邪魔

ガラッ。突然ドアが開いた。

すると、知らない男子が嬉しそうに教室を見渡す。

「ねえ、なんか超カッコ良くない？」

「ヤッバ！あたし超タイプ？」

女子がこそそし始める。

なるほど。これが世間で言うイケてるメンズ、略してイケメンか。

・・・って！

納得している場合じゃない！

なんなの急に！

転校生？そんな話きいてない！

てゆーか、担任がクラス委員長である私に話さないはずない！

そんなことを考えている私や、クラスの連中の前で、彼は悠々と黒板に自分の名前らしき文字を書いた。

「葛城 海斗です。今日からこの3・4の一員になったので、宜しく！！」

につこり笑う彼に、女子はずつキューン！となる。

カッラギ カイト・・・どっかで聞いたことがあるような・・・。

その時、

ガラッ。またドアが開いた。

今度はウチのクラスの担任と、隣のクラスの担任が立っていた。

二人は困惑した表情で、

「困るよ、葛城君」

「そうですよ。君は、4組ではなく、3組の転校生なんだよ？」

とか、何か言い始めた。

でも当然の本人は・・・

「先生、オレもう自己紹介も終わらせちゃったよ。」

もうこのクラスがいい！」

とか問題発言をしている。

「え？葛城君って、ウチのクラスじゃないの？！」

「えゝ！？やだぁゝ！せっかくイケメンきたのにゝゝ」

クラスまでもが混乱し始めた。

いかん！ここはクラス委員長の出番！

私は席からすつと移動し、ドアに足を運んだ。

私を見ると、先生が安心したように

「あつ、桐嶋さん。葛城君に何とか言ってくれないかしら？」

「・・・わかりました」

私は葛城海斗に向き直ると、少しキツめの口調で彼の説得にあたつた。

「葛城君よね？アンタなんでこのクラスにこだわってんの？」

「君名前は？」

「・・・なんでこのクラスにこだわるの？」

「え？なんとなく。ていうか、名前は？」

「・・・聞く耳持たず・・・とまではいかないか。

「とにかく、アンタはウチのクラスじゃなくて、隣の3組の転校生なの。早く移ってくれろ？」

「君キツイこと言うね！クラス委員長？ツンデレっ娘？」

「・・・（怒）」

「だってクラスは転校生の自由じゃん！オレこのクラスでやってきたいの！お願い！」

手を合わせて頼み込む彼。

「私に頼まないでくれる？」

先生に

「どうします？」

というと、

「そうねえ、彼がここにいたいなら、それでいいんじゃないの？」

「そうですね、僕からもクラスの連中に話しておきますよ」

あっさり承諾。

私出てこなくてもよかったのかも。

「ラッキー てことで宜しく！えーと・・・」

「クラス委員長の桐嶋さんよ。頼れる人だから、分からないことがあつたら彼女になんでも聞いて」

「宜しく！桐嶋！」

「・・・席は空いてるとこに座って」

私は速やかに席に着いた。

空いてるのは、前にウチのクラスから転校した皆川の席。

私は窓際の席で、列の最後尾。

葛城が座る席からは結構離れている。

葛城の席の付近の席の奴らが

「よろしく！」

「よろしくね！」

とか言ってる。

ああ、ウザイ！

私ならあのウザさに耐え切れない！！

「あー・・・うん。オレ、こっちじゃなくてさあ・・・」

「ん？」

「桐嶋の隣に行くんだけど・・・」

「マジでか！？」

「桐嶋か！ズリーぞ！」

騒ぎ出す男子共。

女子は私をチラチラ見ながらコソコソしてる。

「もおー！！最悪うー！！」

転校初日。

「うっしー!!」

オレは新しく足を踏み入れることになった教室の前で、気合いをいれた。

新しい教室、新しいクラスメイト・・・そしてなにより・・・。

彼女探しができることに嬉しく思った。

前の学校じゃ、いろいろ誤解されて、拳句の果てに・・・

放課後女子に呼び出されたと思ったら、クラスの女子全員がオレを取り囲んだ。

そしたら、鬼のような形相のクラスのマドンナ2人がオレの前に仁王立ちして、

「私とこの女、どっちを選ぶの?」

と。言ってきた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・は?」

オレは啞然とした。

「そうよ。葛城君はアンタみたいな見た目だけの女じゃなくて、

見た目も中身もパーフェクトなあたしがいいに決まってるじゃない!」

イヤイヤ。なんの話?

「なによ! アンタこそ、なんなのそのダッサイ髪!

この性悪女!、葛城にはね、私みたいな女が合うの!」

「はん! 当然本性を表したわね!

この化粧オバケ!

「なんですつてえ!!!」

「かかってきなさいよ!」

ついにマドンナ二人は、口喧嘩だけでなく、殴り合いの大ゲンカにまで発展した。

オレが間に入って

「オレは、誰かと付き合うとか考えてないから！」
と言って、教室を後にした。

あの頃は、ケアが大変だったなあ……。
なにがともあれ、オレは晴れてこの学校の生徒。
新しく目標立てて、頑張んなきゃな。

ガラッ。思いっきりドアを開いた。

すると、新しいクラスメイトは、啞然呆然。

「ふう〜」

大きく息を吸って、教室に足を踏み入れた。

ずんずん教壇まで進み、できるだけキレイな字で、

葛城 海斗

と、大きく書いた。

「葛城 海斗です。今日からこの3・4の一員になったので、宜しく〜！」

周りは、おお〜みたいな感じになっている。

やりい！！

ガラッ。オレの後ろでドアが開いた。

振り返ると、先生が何故か二人、立っていた。

「困るよ、葛城君」

「そうですよ。君は4組ではなく、3組の転校生なんだよ？」

え？ええ〜！！！！？？？

嘘だろ！？

オレ教室間違えたの？

先生も困惑した表情になっている。

どうしよ！

このままじゃー・・・

「先生、オレもう自己紹介終わらせちゃったよ。もうこのクラスがいい！」

よしっ、これでなんとか、いけそー

「葛城君よね？アンタなんでこのクラスにこだわってんの？」

居心地はいいが、なんか怒ってる声。

よく見ると、そこにはすごく可愛い美少女が。

顔の輪郭は卵みたいにすっとしていて、

目は大きめで、黒目が大きい。

鼻筋はすっ通っていて、

唇はぷるんとしている。

しかも、顔が可愛いだけでなく、

ウエストもきゅっとしていて、

足も細長い。

なにより黒髪をサラッと流していて、

いい香りを漂わせている。

その美しい佇まいが大和撫子のように、オレは一目惚れしてしまった。

「君名前は？」

聞きたい！教えて！

「・・・なんでこのクラスにこだわるの？」

無視。それじゃ！

「え？なんとなく。ていうか、名前は？」

「とにかく、アンタはウチのクラスじゃなくて、隣の3組の転校生なの。早く移ってくれる？」

「君キツイこと言うね！クラス委員長？ツンデレっ娘？」

「・・・」

なんか怒らせちゃった？

「だってクラスは転校生の自由じゃん！オレこのクラスでやってきたいの！お願い！」

お願いします！初恋は叶えたい！絶対！

「どうします？」

「そうねえ、彼がここにいたいなら、それでいいんじゃない？」

「そうですね、僕からもクラスの連中に言っときますよ」

よっしゃああああ！！！！

「ラッキー？てことで宜しく！えーと・・・」
なんて名前？

「クラス委員長の桐嶋さんよ。頼れる人だから、分からないことがあつたら彼女になんでも聞いて」

桐嶋・・・下の名前何かな？

「宜しく！桐嶋！」

「・・・席は空いてるとこに座って」

うわー！！やっぱ超可愛い！！

言われた席に行くと、早速連中が話しかけてきた。

「よろしく！」

「よろしくね！」

けど・・・。

「あー・・・うん。オレこっちじゃなくてさあ・・・」

「ん？」

「桐嶋の隣に行くんだけど・・・」

いったぞおおおお！！！！

「マジでか！？」

「桐嶋か！ズリーぞ！」

オレの青春スタートだぜ！！

私の驚き

「桐嶋の隣行くんだけど・・・」
「はあ?！」

なんなのコイツ!

こういうのが、私の一番嫌いな人種なのにいゝ!

「もおゝ!!最悪う!!」

男子に冷やかされ、女子に残念そうに見られてもお構いなし。
私の隣の席に移動するなり、

「宜しく、桐嶋!」

また笑顔。

でも、さつき皆に見せてた笑顔とは何か違う・・・。

コイツ、私のことどう思ってたの?

「・・・宜しく」

適当に答えた。

そして、コイツは

「怒ってるの?」

と、いきなり言ってきた。

「別に」

そっけなく返す。

そのまま微妙な空気が流れたまま、ホームルームは終わった。

「葛城い。理科室行こうぜえ」

男子が呼んでる。

「おおお!!」

返事して、私を気にするように、横目でチラッと見て、そのまま行
った。

ま、さつさとして行って欲しいんだけど。

男子に続いて女子も塊になってどんどん教室を出て行く。

気づけば教室には私しか居なかった。

さてと。

さっさと鍵しめて私も行こつと。

次の授業もついでに準備しとくか・・・。

鍵をちゃんとしめて、私は教室を出た。

廊下を歩いているとき、

「桐嶋！」

誰かに呼ばれた。

振り返ると、隣の2組のクラス委員長・斎藤 裕也が立っていた。

この斎藤、結構モテるらしい。

去年の3年生に告白されているのを見た。

いろんな所で、噂をよく聞く。

・・・私のことが好きだとか。

もちろん、私はそんなの信じてない。

そんなの・・・おかしい。

冗談に決まってる。

「何の用？」

「いや、明日の放課後クラス委員長の集まりがあるから・・・」

「え？それって今日じゃないの？変更になったの？」

思わず驚いてしまった。

「うん。学年主任が君に伝えといてって」

「あ・・・。そうなんだ・・・」

「それでさあ・・・」

「何？」

「今日一緒に帰らない？」

「・・・え？」

一緒に帰ろうなんて、皆川以外、私に言う人は居なかった。

「駄目・・・かな？」

「別に。大丈夫だよ」

ヤバイ！思わずOKしてしまった。

「そっか！それじゃ、放課後！」

斎藤は笑顔で立ち去った。

ええええ！！！！

どうしょ・・・。

まあ、斎藤はボディガード代わりにでもなるかな。

ぼおっとしてる場合じゃない！

早く理科室行かなきゃ！

授業中もずっと斎藤のことが気になっていた。

斎藤ってなんで私にそんなこと言ったんだろ・・・。

葛城といい、斎藤といい、今日はなんでこんなに男子が寄ってくるの？

メンドクサイ・・・。

気づけば、授業も終わっていた。

教室に戻ろうと席を離れた私に今度は、

「ねえ、桐嶋さん」

女子が話掛けてきた。

しかも、男子に人気が高く、女子に嫌われている、安西 由奈。
顔はまつげが長くて可愛いんだけど・・・。

男子に向ける笑顔と女子に向ける笑顔が違う。

彼女自身、女子に好かれようなんて思っていないみたいだけど。

「・・・何？」

気になる

「へ？桐嶋の下の名前？なんで知りたいの？」

「あゝ・・・一応隣だしさ・・・」

下の名前で呼んでみたい、なんて言えるかあ！

「えーと・・・確か・・・」

「あれ？なんだっけ？」

「なんかメチャクチャ変わった名前だったよな」
変わった名前？

「うゝん！最終手段だ！女子に聞こう！」

そう言うとその辺で盛り上がってる女子に話し掛けた。

「なあなあ、桐嶋の下の名前ってなんだっけ？」

「はあ！？なにそれ！」

「でたよ、でたよ。男子の桐嶋びいき」

「いいじゃんかよ！」

「はいはい、りょーかい」

「確か、愛蝶だったよね？」

・・・アゲハ？

「あゝ！そうそう愛蝶！」

「サスガ出鳴先輩の妹だな！」

おお！名前だけでなく、お姉さんの名前ゲット！

「だってよ！」

「うん！サンキュー！」

オレは女子にはにかんでみた。
すると女子は頬を染め、

「う、うん」

「役に立てたんなら・・・」

そう言いながらどっかに退散。

悪いけど、今のは誰にでも見せる顔だよ。

「あ！いつけねえ！忘れ物しちゃった！」

「マジかよ！」

「後3分！急げ！」

「うっし！2分で取ってくる」

「よいい・・・ウドン！」

アホ臭いコールで新しい仲間はおれを見送った。

おれは足に自信があったし、急いでいたのでダッシュした。
教室前の廊下に入ろうとした瞬間！

桐嶋の後ろ姿が目飛び込んだ。

思わずおれは急ブレーキをかけた。

幸い、桐嶋には気付かれずにすんだ。

でもあんまり急だったせいで、足首をひねった。

すんげーズキズキする。

勇気を出して、話かけようとした。

が、桐嶋が誰かと話しているのがすぐに分かった。

なんだコイツ？

顔は結構整ってて、身長はおれと同じくらい。

でもなんか・・・。

桐嶋に色気目使ってるような気が・・・。

確証はないが、おれの経験でなんとなく分かる。

桐嶋を誘ってんのか？

うっつ、こっからじゃ聞こえない。

そうしてるうちに、ソイツはどっかいった。

桐嶋はヤツが去った後も、しばらく突っ立っていた。

すると急に我に返ったようにはっとし、おれとは別ルートから移動
場所に行った。

おれも急いで忘れ物を取って教室に向かって走った。

アイツは誰なんだ？

桐嶋を狙ってたんのか？

何を話したんだ？

気になる・・・。

私のムカツキ

「何？」

いきなり話掛けられた。

しかもスカート曲げてるヤツに。

化粧もヤバイし、髪も染めてる。

でも、素の顔は可愛いかも。

案外いい人だったりして？

「アンタ、ナニ様のつもり？」

前言撤回。

「……はあ？」

「ちよつと可愛くて男子共にモデルからって、威張らないでよ」

意味わかんない。

「なんのこと？」

「惚けんじゃないわよ。」

葛城海斗といい、斎藤といい、なんでアンタみたいなヤツが人気なのよ」

「知らないわよ、そんなこと」

「ふん、まあアンタみたいなヤツはどうせ男に興味無い振りしてんでしょ」

カチンときた。

「思いたきや、勝手に思えばいいじゃない」

「はあ？」

今度は安西がイラつく番だった。

「思い込みが激しいこと。」

大体、なんなのその身なり。

髪を染め直して、化粧落として、第一ボタンしめて、リボンキツくして、シャツ入れて、スカート直して、靴下変えてから私に指摘しなさい！」

「なっ・・・」

私の説教マシンガンにうるたえない者はいない。
踵を返して私は教室を退出した。

ふん、ざまあみろ。

教室に戻ると、男子が馬鹿馬鹿しいことをしていた。

黒板には、「彼女にしたい女子ランキング」という文字がでかでかとあった。

暇なヤツらだ。

ふと1位のほうに目をやると、そこには・・・。

桐嶋は1位

気になる。

何を言われたのか、桐嶋は授業中もずうっと上の空って感じだったが、オレの読みは的中した。
やっぱ桐嶋は可愛い。

どこか遠くを見つめるその瞳はとても澄んでいた。
綺麗だ。

オレはこんなに人にトキめいたのは初めてだった。

「うっしっ！アレやるぞ！」

休み時間。

オレは教室で仲間と遊んでいた。
もちろん女子もいた。

だが、「アレ」と言った瞬間、
「トイレ行こ」

と、顔を赤くしながらどっか行っただ。

その他の女子も、皆様子が変わり、緊張した空気になった。

「アレって何だよ？」

オレは仲間に聞いた。

「見てればわかるって」

それ以上は話してくれなかった。

「アレ」って何だ？

少し経ってから、白い紙が配られた。
配られたのは野郎だけ。

もちろんオレも。

野郎共は悩んだ様子だった。

「これで何すんだ？」

「彼女にしたい女子を書け」

そう言い残して去って行った。
なるほど。

これは「彼女にしたい女子ランキング」だな。
だから女子がああなっただな。
納得。

オレはできるだけキレイな字で「キシマ アゲハ」と書いた。
隣にいたヤツは「アンザイ ユナ」と書いていた。
周りを気にせずオレは堂々と投票箱に白紙を入れた。
これで桐嶋を狙ってる奴が大体どのくらいいるかわかる。

「結果発表！」

場は更に様子が変わった。

野郎はおおっ！と萌える。

女子はもつと緊張してるようだ。

オレは桐嶋のコトで頭がいっぱいで、早く結果が知りたい。
黒板にベスト5が書かれた。

5位……違う。

4位……これも違う。

3位……こっちも。

2位……もうないのか？
そして1位。

「桐嶋 愛蝶」

・・・・・・・・・・。

え？

桐嶋が1位？

オレは緊張した。

ライバルは11人。

コイツら以外にもいるはずだ。
だが。

オレは負けないっ！

私の初体験

そこには「桐嶋 愛蝶」と書かれていた。
はあ。

こいつらはどこまで暇人？

私が気にするまでもないけど。

私はそう思いつつ、席に着いた。

男子は馬鹿そうな顔でニタニタ。

マジでキモイ。

女子はいつも通り冷たい視線のつもりらしい。

どうでもいい。

チャイムが鳴って、皆席に着いた。

授業中、何度か葛城が話掛けてきたけど、適当に返した。

午後の授業も全部そんな感じ。

流石にここまでやれば、葛城も私を嫌うだろう。

それでいいんだ。

それが私なんだ。

最後の授業とホームルームが終わった。

これで今日の全日程が終了した。

私はさっさと帰ろうと、教室から出た。

玄関で靴を履き替えて出ると、斎藤が出口で待っていた。

「よう。早く帰ろっか」

当然のように言った。

チッ。

約束を破るのは好きじゃない。
でも断れなかったからトンスラかこうとした。
でも斎藤は思った以上にしつこかった。
言われるがまま、私は斎藤について行った。
すれ違うたびに振り返られた。
見せ物じゃないっ！て言いたかったけど、控えておいた。
面倒は御免だ。

外に出ると、雨が降っていた。
どうしよう。

あいにく、傘が無かった。
斎藤は持っていた折り畳み傘を取り出して広げた。

「桐嶋、一緒に入ろう」

そう言われて、思わず斎藤を見上げてしまった。

風邪を引くのは嫌だったが、それ以上に人の傘に入るのは嫌だった。

「私はー」

私が答える前に、斎藤は私の肩を掴んで走り始めた。

斎藤は笑っていた。

私はなぜか震えた。

驚愕

おかしい。

桐嶋はオレに何か隠している。

ま、悩み話せる程の仲じゃないけど。

でも、午後から様子が変だった。

無論、オレは、午後もずっと桐嶋を見ていた。

もちろん先生に気づかれないように。

あんな綺麗な顔を眺めずにはいられない。

やはり、オレは桐嶋に恋をしているんだ。

桐嶋はオレに素っ気ない。

それでも、オレの愛が冷めるコトはなかった。

ああ、桐嶋はきつとスタイルいいんだろうな、

あのプリプリした唇にキスしたいな、

艶やかな髪をそつと撫でてみたいな・・・。

って何してんだオレ！

ベットの上で、手を変な風にして！

桐嶋が見たら引くぞ、絶対！

自分でボケて、自分に突っ込んでるオレ。

しかーし。

実はオレ、結構リッチなんだよね。

母親は一流弁護士。

父親は一流企業の部長。

当然年収はパナイ。

つくづく裕福なんだよね。

でも、それなりに愛情も注いでもらってる。

親は

「海斗はやれば出来る。東大も夢じゃない」
って。

無理だろ。

流石に。

親は両方とも今日は帰って来ない。

母親は今日は実家に泊まるらしい。

父親は出張。

兄弟はいない。

なんて、自分で自分の状況を整理していた。

時計は6時を差していた。

そろそろコンビニで弁当でも買おっかな。

オレはジャージに着替えて家を出た。

コンビニでラーメンとアイスを買った。

コンビニをすぐに出た。

コンビニから家に帰る途中、小っこい公園を通る。

この時間じゃ、だれもないだろ。

ふと公園に目をやると、オレは思わず足を止めた。

ブランコに、意外な人が座っていた。

桐嶋だ。

俯いている。

オレはダッシュで桐嶋の元へ駆け寄った。

「桐嶋！」

桐嶋は驚いたようにオレを見上げた。

その目は、赤く腫れていた。

「泣いたのか？」

桐嶋はまた俯いてしまった。

オレは桐嶋の衣服がおかしいコトに気付いた。

リボンは乱れ、

ボタンはところどころ掛け間違えていたり、
スカートはくしゃくしゃになっていた。

「お前・・・」

オレは何があつたのか予想はついた。

オレから目を逸らそうとする桐嶋は、とても弱々しく見えた。

「家に来いよ」

「え？」

オレは既に桐嶋の手を握っていた。

私の・・・

あの時、私は自分が何をされているのか、全く分からなかった。
覚えているのは1つ。

怖かった。

できるだけ正気を保って抵抗した。
それでも、アイツには勝てなかった。
斎藤には、歯が立たなかった。

斎藤は私の肩を抱いて走った。

私は何故か震えていた。

嫌な予感がしていた。

それでも私は斎藤について走った。

斎藤は私の知らない道を走っていく。

「ちょ、ちよつと・・・」

私は止まろうと声を出した。

斎藤は聞こえないのか、

「もうすぐ着くから」

と言った。

何言ってるの？

私の家あっちなんだけど・・・。

斎藤はある家に着くなり、門をくぐって屋根に入った。

「ここ・・・斎藤の家？」

「そうだよ」

私は敷地の広さに驚いた。

家はたいそう豪華。

芝生が青く生い茂った庭。

高級車が止められた駐車場。

私は直感した。

コイツ、金持ちだな。

こういう奴と結婚したら楽になるかなあ。

そんな風に驚いている私に斎藤は

「上がった」

と言った。

人の家にかかるのはちょっとアレだったけど……。

金持ちの家というものに憧れていた私は

「……お邪魔します」

と言って上がった。

斎藤は私をリビングに案内した。

流石金持ち。

リビングも豪華だ。

私は前を歩いている斎藤の右肩がずぶ濡れなのに気付いた。

私もかなり濡れてはいるが、斎藤はそれ以上だ。

申し訳ない。

私は心の中で手を合わせた。

斎藤は私を高級そうなソファーに座らせてくれた。

結構広いし、座り心地もいい。

斎藤は

「タオル取ってくる」

と言ってどこかに消えた。

私は自分がまだ震えているのに気付いた。

確かに斎藤はいい人そうだ。

でも何か裏がありそうだ。

私が一人で悩んでいると、斎藤が戻って来た。

「はい」

とタオルをくれた。

「ありがとう」

私は礼を言ってからタオルを受け取ろうとした。

タオルをもらおうと手を伸ばした。

急に斎藤が伸ばした私の手を掴んでそのまま右手も引っ張りベツトに倒した。

「ちよつ、何?!」

さつき以上に震えた。

私の震えが伝わったのか、斎藤は

「震えてるね」

と笑顔で私に言った。

私は何も言えなかった。

体が言うことを聞かない。

―体が―

心の私は泣きそうだった。

「離してっ・・・!」

それがやつと口から出た言葉だった。

私は手に力を入れて、振りほどこうとした。

でも斎藤に対して、私は無力だった。

斎藤は抵抗する私の両手をフェイスタオルでキツく結んだ。

「何すんのっ!」

私は抵抗を続けた。

「君は僕の思った通り。凄く綺麗だね」

その一言で私の時間は止まった。

それから何があつたのか覚えてない。

気付いたら、公園のブランコに座っていた。

誰にも会いたくない。

でも1人だけでいい。

誰かに会いたい。

そんな複雑な思いが私の胸に溜まっていた。

寂しくて・・・。

悲しくても泣けなかった。

そんな気持ちの中。

私をスーパーヒーローが助けに来てくれた。

「桐嶋！」

その声が私を闇から助け出してくれた。

出鳴先輩登場！―前編―

オレは困惑していた。

意外なことが起きたからだ。

オレは桐嶋の白くて綺麗な細い手を握っていた。

桐嶋は驚いていた。

オレは桐嶋をブランコから引っ張って立たせた。

桐嶋は不意打ちを喰らったようで、引っ張った弾みで、

オレに倒れ掛かった。

オレは反射的に受け止めた。

オレの胸にすがりつく体制になった桐嶋は、恥ずかしさのあまり、

オレから目を逸らした。

そんな桐嶋の頬は、赤く紅潮していた。

オレはそのまま桐嶋の小顔を両手で包んで、オレと目を合わせさせた。

桐嶋はオレをじっと目を逸らさず直視していた。

黒曜石のような漆黒の瞳と、長く上を向いた睫毛がドンとオレをついた。

オレは目を逸らした。

その時桐嶋は急に背伸びして、オレの耳元で、

「私、アンタ嫌いじゃない・・・」

と、小さくそれでもはつきりと澄んだ声で囁いた。

そしてオレから離れると、上目使いでオレを睨んでから後ろを向いた。

オレは桐嶋の手を引っ張って「待ってくれ！」

と引き止めた。

桐嶋は

「まだ何かあるの？」

と、ドギマギしながら聞いてきた。

オレは直ぐ様ポケットから携帯を出した。

「メールするからメアド教えてっ」

ダメ元で聞いてみた。

意外にも、桐嶋は小さく頷いてノートの切れ端にメアドを書いて、直ぐ様オレに握らせて去って行つた。

オレはその紙を強く握り締めて、家に帰つた。

翌日、桐嶋とドギマギしながら放課後を迎えた。

帰る準備をしてたら廊下で何か盛り上がってる。

クラスの奴が大騒ぎして教室に駆け込んできた。

「出鳴先輩がいらっしゃったぞー!!」

いつきに周りの雰囲気が変わつた。

「出鳴先輩だとっ?」

「きゃーうそお!!」

こうしちやおれん、と言う感じで廊下に人がなだれ込んでいく。

出鳴先輩? って確か・・・。

桐嶋はため息をついて逃げるように教室から出た。

やはり。

桐嶋のお姉さんのようだ。

そんな事を考えていたオレの耳に威勢のいい声が聞こえてきた。

「諸君、元気にしていたかい?」

教室に入ってきたのは近くの頭いい高校の制服に身を包んだ美女だった。

細身なようで、紺色のブレザーが良く似合っていて、

身長は170超えているようだ。

短いスカートから伸びる長い足は、黒く長いソックスに包まれていた。

何よりも驚いたのは、その顔は、桐嶋が少し大人になった顔。

オレは驚きのあまり、出鳴先輩を凝視した。
オレの視線に気付いた出鳴先輩がオレの方へ歩み寄ってきた。
まるでモデルのようだ。

オレの目の前まで来ると、ニヤニヤしながら

「君、これから暇かい？」

と聞いてきた。

「あ・・・はい」

オレは思わず答えてしまった。

「そうか。それじゃあ、これから私に従いてこい」

「はい？」

出鳴先輩はそう言うと、オレの返事を待たず、

「早く行こっ」

と満点の笑で彼女にでもなったかのように振舞った。

「葛城ずりーぞ！」

「皆の出鳴先輩だから独り占めすんなよ！」

オレは仕方なく、教室を後にした。

出鳴先輩は流石中学時代モテモテだったため、話が面白い。

おまけに女子の間でも一番人気の存在だったそうで、憧れのマドンナだ。

しばらくして、近くのファーストフード店に入ると、奥の席に座った。

オレは出鳴先輩の正面に座ってウーロン茶を頼んだ。

出鳴先輩はオレンジジュースを頼んでいた。

やがて飲み物が運ばれ、出鳴先輩は一口飲んで、

「で？」

と切り出した。

「は？」

オレにはなんのことが、さっぱり分からなかった。

「だーから！私の愛蝶に何てことしてくれたの?!」
怒っているようだ。

「私……。見たんだ……」

不機嫌そうな顔。

その顔があまりにも桐嶋にそっくりでオレはウーロン茶を吹き出し
そうになった。

出鳴先輩はテーブルから身を乗り出して、

「単刀直入……。？に言うけど、昨日、愛蝶とプチ公園で会ってた
でしょ」

「は……。はい」

なんだこの人？

「しかもいつもピシッと制服を着こなしている愛蝶が……。

あんなに着崩れしてるなんて……。

アンタ、あの子を襲ったでしょ」

「そんなじゃないです！あれはその……」

「とにかく！いくらあの子が可愛くてモノにしたいからって。

私を通して許可を得てやりなさい!」

はあ。

この人は妹loveのようだ。

「それで」

今度はなんだよ？

「あの子……。どう?」

はあ？

出鳴先輩登場！―後編―

はあ？

出鳴先輩はオレの隣の席に移動して、小声で続けた。

「その・・・。」

姉の私が言うのも難だけど・・・。」

言葉を切って、出鳴先輩は続けた。

「愛蝶は、超美少女だから」

「知ってます」

オレは即答した。

出鳴先輩は片方の眉を上げると、

「そうね。そのくらい、ウチの中学に通ってたら常識ね。」

って、最後まで聞きなさい！」

ノリツツコミ？

「スタイルも抜群で、胸も3年になってからデカくなり始めてんの」

オレはいろいろ妄想しながら、

「で？」

と興味なさげに聞いた。

確かに、桐嶋は制服着てるからよくわかんないけど、

胸は結構ある。

出鳴先輩はこう続けた。

「それで・・・。」

やったんでしょ？感想は？」

顔を赤らめながら、出鳴先輩は聞いてきた。

だから・・・。

「オレは、桐嶋にそんなヤマシイ事は何もしてません」
キッパリと断言した。

そのあとオレは、いろいろ出鳴先輩に聞かれた。
オレはそれをバツサリと答えた。

最後の別れ際にメアドを交換してもらった。

「izunahamaddonnnadesuyonn」

.....。

自意識過剰という言葉がピッタリな気がする。

まあ事実そうだけど。

「あそーだ！」

出鳴先輩が急に振り返った。

「なんで私がアンタが愛蝶と会ってた人だと分かったと思う？」

「え？なんでですか？」

そう言われれば。

あの暗がりの中で、何でオレと分かったんだ？

「それはね.....。

愛蝶が妙に浮かれてたから、あの手この手で聞き出したのよ」

浮かれてた？

桐嶋が？

「てことで。バイバーイ」

出鳴先輩は去って行った。

私の興奮―前編―

「メールするからメアド教えてっ」

私は自分でも何を思ったのか、全く理解できなかった。

私は高鳴る胸の興奮を抑えて、なんとか紙切れにメアドを書くことが出来た。

その紙を葛城に渡して、私は無言で公園を後にした。

自分でもなぜこんなに興奮しているのか、理解できなかった。

コンピュータがエラーを起こしたように、

私の中のicチップが異状になり、理解不能になっているようだ。

家に帰ると、出鳴姉さんが玄関で芳香剤を取り替えていた。

「おかえり、愛蝶」

と、芳香剤を取り替え終わると私の服を見て口をポカーンと開いた。

「愛蝶・・・その服・・・」

そして急に大声で

「芹香！ 芹香姉ちゃん！」

と叫んだ。

台所から家の長女・旧姓・桐嶋 芹香がゆっくり歩いて来た。

ちなみに家の芹香姉さんは19。

で、今年の10月で23才の年上エリートと結婚する予定。

漫画のワンシーンのように、手にフライ返しを待ってやってきた。

―後編に続く！―

私の興奮―後編―

カラン。

芹香姉さんはフライ返しを落とした。

「あ・あ・．．．げは？」

その服．．．どしたの？」

長い睫毛が上下にパチパチ開く。

「誰かと．．．やったの？」

すかさず出鳴姉さんが叫んだ。

「やったんじゃないのよ！」

やられたのよ！」

その声に気づいたのか、上からドタドタ．．．と階段を大急ぎで降りる音がした。

「なになに？！」

やったって？」

ダツシュで階段を降りてきたのは、我が家の末っ子。

四女の桐嶋 玲羅だった。

この玲羅はやたらと恋愛好き。

小四だというのに、恋愛にも私以上に詳しい。

色んな男の子から、たくさん手紙を貰っている。

「愛蝶姉、誰とやったの？」

年上？年下？同級生？」

ねえねえ、教えてよ！」

私にキラキラした目を向けてくる。

「別に．．．。」

その．．．転んだだけ！」

私は嘘をついた。

「転んだだけでそんなになるわけないっ！」

「っ！あの・・・転んで階段から落ちたの！」

「それなら、服がもつと汚れてる」

「じゃあ、奇跡的に汚れなかったの！」

「転んで、落ちても、そんな着崩れしない」

「うぐぐ・・・」

ダメだ。

コイツらに嘘は通用しない。

「ねえ、愛蝶。

とりあえず、お風呂に入って。

もうすぐ夕ご飯できるから」

芹香姉さんはそれまで黙っていたのに、急に口を開いた。

「ええ」。

こっからが重要なのにいゝ」

「もうちょいだけ！

ホント、すぐすぐ！」

ダダをこねる玲羅と出鳴姉さん。

私は芹香姉さんの言葉に従った。

すれ違い際に、出鳴姉さんが私に

「なあに浮かれてんのよ！」

と冷かしの表情で耳打ちした。

へ？

浮かれてる？

この私が？

私はできるだけ表情を変えずに、出鳴姉さんを一睨みして、足早に

風呂場に向かった。

ドアを閉めるなり、さっさと制服を脱いでハンガーに掛けた。

そして、下着姿になってから自分を鏡でじっくり見た。

確かに・・・。

出鳴姉さんに言われたとおり。

私の口元は何気に上に上がっている。

目はいつもより垂れている。

私は自分を恥ずかしく思った。

「こんなだらしのない顔で歩いてたなんて・・・」
シヨックだった。

私は下着姿の自分を改めて見た。

あの恐怖の時間は、私の頭に完全にこびり付いている。

胸を舐められた実感や、スカートに入ってくる手。

私は無意識のうちにしゃがみこんでいた。
怖かった。

それだけしか覚えていなかった。

そんな恥辱と屈辱の中、私は・・・。

下着も全部脱いで、風呂でシャワーを浴びながらアイツのことを考えていた。

アイツは私に手を差し伸べてくれた・・・。

昨日会ったばかりの。

こんな性格の悪い私に。

私は嬉しかった。

ん？まてよ？

なんでアイツのことばっか考えてるの？

これって・・・一目惚れ？

私は何で？

いや、何でってどうか。

え？え？

私は洗い終わった身体をタオルで拭いた。

混乱したまま部屋着に着替えて食卓に足を運んだ。

「ただいまぁー」

玄関でお母さんの声がした。

「おかえりい！！」

玲羅が大きい声でお母さんに言った。

「お母さん、荷物持つよ」

出鳴姉さんはお母さんの手伝いに回った。

「はいはい、ありがとう出鳴」

お母さん・桐嶋 翠は36才。

つまり、17で芹香姉さんを産んでいる。

出来ちゃった結婚らしい。

「芹香、そんなに動いて大丈夫？」

出鳴姉さんが芹香姉さんの具合を聞いた。

芹香姉さんは、かなり大きめのお腹をさすりながら、

「大丈夫。安定してるわ」

実は、芹香姉さんは妊婦。

しかも10ヶ月目。

お母さんと同じで出来ちゃった結婚。

予定日かなり近づいている。

「今日もお医者様に順調ですよ、って言われたの」

「そう……。よかったわね」

と嬉しそうに目を細めた。

芹香姉さんの大きなお腹を愛おしそうに撫でながら、

「おばあちゃんですよ」。

元気に産まれてくだちゃいね」

と言った。

すると、玲羅もお母さん同様に芹香姉さんのお腹を撫でた。

「玲羅おばちゃんできゅよ」。

あんまり芹香姉いじめないでね」

こうしていると、どこにでもある幸せをシミジミと感じる。

「愛蝶、あなたも撫でたら？」

突然私に話題を振ってきた。

私は、

「いいよ。」

別に……」

ため息の多い一日

「はあ」

本日5回目のため息。

オレは授業を受けている。

面白くない。

勉強なんて教科書読んでりや、ちょちょいのちょい。

桐嶋はさっきからずっと真剣に授業を聞き、ノートを書いている。

その真剣な表情と言ったら・・・。

誰だって惚れるであろう。

ああ女神様（桐嶋）、オレにその美しすぎる顔を向けて下さい。

なんて言いたいぐらい。

桐嶋はオレの視線に気付いたのか、横目でちょっとだけ、オレを見つめた。

でもすぐに、桐嶋の視線は黒板に戻った。

オレはちよっとシヨックだった。

「私、アンタ嫌いじゃない・・・」

あの言葉は嘘だったのか？

なんて、ドラマっぽすぎる。

でもなんか気になる。

本当に気になる。

オレって本当に桐嶋の事が好きなんだ。

初めて会った時からあの瞳に見つめられると心臓が飛び出しそうになる。

凜々しすぎる顔立ち。

なめらかに流れる髪。

ほっそりとしたスタイル。

あの甘い声……。

その全てがオレの感覚を支配する。

好きになっても仕方ない。

可愛いだけじゃない。

オレの事、嫌いにならないと思うし。
多分。

家に帰ってから、桐嶋にメールしてみた。

「葛城 海斗です。

登録宜しく！」

という普通のメールを送った。

返信は来なかった。

「はあ」

本日12回目のため息。

私の困惑

「葛城 海斗です。」

登録宜しく！」

私の携帯には、葛城からのメールが届いていた。

「・・・」

どうしよ・・・。

本当にメールするとは思わなかった。

私は葛城に返信することにした。

「りょーかい ㄟ」

・・・。

なんか恥ずい。ボツ。

「メールありがと」

ベタ過ぎる気が。ボツ。

もっと親密感を入れなければ。

「ありがとう？」

本当に嬉しい（＊´、＊）」

引くかな？ボツ。

・・・ボツ。

・・・ボツ。

ボツ。ボツ。ボツ。ボツ。ボツ。ボツ。

とにかくたくさんボツにした。

「ありがとう」

これに決めた。

突然。

「あーげーはっ？」

出鳴姉さんが私の部屋にノックなしで飛び込んできた。

「！！！！！！」

私は驚きすぎて、送信しようとしたメールを削除しようと、とりあえずボタンを押していた。

「メール・・・？」

出鳴姉さんは急に私に飛びついてきた。

私の胸をムンズと掴みながら。

「っ！ちよつと・・・出鳴姉さん！」

私はワシャワシャしてくる姉さんを剥がそうとした。

出鳴姉さんは、私の手から携帯は奪った。

「うふふ」

「ただだめ！！！」

チャラチャリン？

え・・・・・・・・・・・・・・・・？

「送信完了！」

じゃ、あとでねん？」

最悪。

私はすぐに送信したメールの内容を確認した。

「ありがとう？」

؟؟・・・・・・・・。。。

「嘘・・・」

私は最悪な展開を迎えてしまった。

出鳴姉さん。

わざとだな。

うん。

それしか考えられない。

今の私の頭の中は、葛城がどんな反応を見せるか・・・。

ただそれだけ。

葛城い、勘違いしないで。

お願いします！！

返信

来ました。

待ちに待った桐嶋からの返信。

「ありがとう？」

・・・・・・・・・・・・・・・・どうした？！

何があつた？

あんなガードの堅い美少女がメールごときに・・・。

？マーク・・・。

嬉しいが、素直に喜べない。

欲張りです、はい。

オレの心臓はバクバクいつている。

只今、心拍数上昇中だ。

ヤバイ。

このままでは、心拍数が上がりすぎて死ぬ。

絶対死ぬ。

オレは興奮する気持ちを落ち着かせ、部屋から出た。

今日は珍しく母さんが帰って来ている。

こんな事は稀だ。

「あら海斗」

オレが2階から降りてくると、母さんはキッチンにいた。

「今日はね、母さん早く帰ってきてから料理しようと思うの。

海斗、何かリクエストはない？」

はつきり言おう。

母さんの料理は破壊的だ。

中学の時に急に

「弁護士になりたい！」

と思ったせいで、勉強ばかりして料理が出来なくなっただけらしい。

で。

こんな風に家庭的ではない。

ビジネスウーマンだ。

「るんるつるゝん？」

答えないオレに呆れたのか、母さんは料理を作り始めた。

「今日は、グラタンを作るわ！」

母さんは料理ブックを片手に、料理を作った。

オレは、自分の部屋に戻ってクラスのヤツとメールをした。

しばらくして。

1階から母さんがオレを呼んだ。

オレはすぐに下に下りて、母さんの料理を観察した。

「何かねー、料理ブックとちよつと違うのよー」

そりゃそうだ。

母さんみたいな、食材の素質を分解するぐらいの天災はそうそういない。

母さんの料理は本当に笑えない。

呆れる。

オレは母さんの言う「グラタン」を見て一言呟いた。

「巨神兵？」

あのジブリの名作に登場する母さんのような、破壊兵器にそっくりだ。

「やーね！海斗ったら！

ウケなんてしなくていいのよ」

母さんは笑い飛ばした。

いや、マジなんだけど。

母さんは急にハツとなって、

「母さんちよつと銀行に行ってくるわ。

先に食べててね」

母さんはそう言つと、さつさと家を出た。
やれやれ。

ま、こういうのは初めてじゃないんだけど、な。

オレは母さんの言う「グラタン」(巨神兵)を食卓に運んだ。
ピンポン。

チャイムが鳴った。

面倒い。

オレはドアを開けた。

玲羅の仕事

「ねえ、誰かいない？」

クラスでは、さつきからある女の子が皆に犬を飼わないか、と聞きまくっている。

女の子の名前は宮沢 由香里。

どこにでもいる、男子とあんまり喋らない、喋れない性格もルツクスも平凡な子。

この由香里、道端で拾った子犬を自分の家では飼えないから、クラスの子達に頼み歩いている。

皆何かと理由を付けて断っている。

理由は簡単。

由香里と話すのが嫌だからだ。

由香里は大人し過ぎて、貞子と陰口を叩かれている。

真っ黒で腰まで伸びた長い髪と、青白い肌が見事にマッチしている。

私はだんだん由香里が可哀想になってきた。

そこで。

「由香里」

優しい優しい玲羅ちゃんは手伝ってあげることにした。

「手伝おっか？」

由香里は嘸かし驚いたであろう。

こんな可愛くて皆に大人気の学校のアイドル・桐嶋 玲羅ちゃんが話しかけてきたんだから。

由香里は、

「今日放課後空いてる？」

とだけ聞いた。

ありがとうはないんだ。

私はオツケーしてあげた。

授業中。

いつものように、手紙が回ってきた。

送り主はいつも一緒につるんでいる沢田 奈々。

このクラスのNo.2だ。

もちろん、No.1は私だけだ。

>さっきのあれ、何？<

私はすぐに返した。

>何が？<

>貞子に話しかけてたじゃん<

>何か可哀想だな〜って。

>好感度上がりそーだし<

>ああ〜

>面白そうじゃん<

>でしょ<

>アタシも入れてよ<

>いいよ<

こいつは、私の行くところならどこでも付いてくる。

なぜなら。

私に付いてきたら人気が上がるからだ。

ということだ。

私は由香里の代わりに、犬の飼い主探しをしている。

学校じゃなくて、住宅地で。

その方が飼い主見つかりやすそうだし。

今のところ。

候補ナシ。

いっぱい追い返された。

気付いたら、結構遅くなってた。

「次で最後にしない？」

奈々が切り上げよう、としている。
ま、暗くなってきたしいつか。

「うん」

私たちは「葛城」と書かれた家のインターホンを押した。
この家凄く金持ち。

広い駐車場には高級車が止めてある。

家の大きさも無駄に広い気が。

葛城さんは、つい最近引っ越してきたばかりだっけ……。
ガチャ。

ドアが開いた。

中から出てきたのは、爽やか系のイケメンだった。
ジャージがなんか似合ってる。

「こんばんは」

奈々も同じことを考えてるようだった。

「あの……何か？」

そうだった！

「犬！飼いませんか？」

「雑種なんですけど、超可愛いんです、ほら」

私と奈々は、緊張しながら写真を見せた。

「うーん……」

イケメンさんは悩んでいる。

カッコイイ。

奈々の目もキラキラしてる、同じことを考えてる。

「いいよ」

イケメンさんはオーケーしてくれた。

「ホントですか?!」

「うん、もちろん！」

イケメンさんは、爽やかな笑を見せてくれた。

素敵？

「やった〜!!」

いろんな意味で、私と奈々は飛び跳ねて喜んだ。
ぐううう。

私の腹の虫が鳴った。

「・・・・・・・・ぷふっ」

嘘お！！

イケメンさんに笑われた。

奈々も笑いをこらえている。

「飯食つてく？」

私は腹ペコだったので、頷こうとした。

それより先に、奈々が

「はいっ！ありがとうございます！！」

と言った。

私もお言葉に甘えた。

「・・・・・・・・巨神兵？」

私と奈々は、イケメンさん⇨海斗さんにグラタンをご馳走してもら
うんだけど・・・。

海斗さんのお母さんが作ったというグラタンは、巨神兵だった。

海斗さんは電話中。

「・・・・・・・・うん・・・・・・・・分かった・・・・」

大丈夫・・・・・・・・じゃ」

海斗さんは、電話を切ると、苦笑した。

「まあ、見た目はあれだけど、味は普通だから」

私たちは、一緒に食べ始めた。

味は意外と美味しかった。

家より、具が多くて、材料も新鮮な感じがした。

さすが、金持ち。

ちなみにご飯の後に、愛蝶姉に迎えにきてもらう予定。

「ふう〜」

またハモった。

飼い主も見つかって、お腹満腹で、年上のイケメンに会えて、最高の一日だった。

ピンポン。

「あ、来た」

海斗さんは、

「一応挨拶」

と言って、3人で玄関に行って鍵を開けてもらった。

案の定、愛蝶姉が立っていた。

私と奈々は、家がすぐ近くだから途中まで送ってもらう予定、奈々が。

愛蝶姉は、海斗さんの顔を見て真っ赤になった。

お。

さすがの愛蝶姉も、イケメン・海斗さんには・・・。

で、あれ？

何か海斗さんまで固まってる。

これは居ちゃいかん・・・。

「奈々、ちよつと・・・」

私は海斗さんにウインクして、海斗さん達から見えないところまで奈々を引っ張った。

「何か興奮する！」

「ミートウ」

海斗さん達から見えなくても、こっちからは見えるし会話も聞こえる。

超ラッキー シ

私の困惑

なんで？

なんで玲羅が葛城の家にいるの？

「今××××××××の家にいる！

7時に迎えにきて〜！

待つてるよ（＾0ー0＾）」

玲羅からのメール。

こんな風にメールを送り付けてくるとき、玲羅は絶対に嫌とは言わせない。

私は

「分かった」

とだけ、返信しといた。

で、今。

私は例の家に到着。

真っ先に玲羅が出てきた。

続いて玲羅の親友・奈々。

最後に出てきたのが・・・。

葛城 海斗だった。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・。

私は絶句した。

なんで？

なんで玲羅が葛城の家にいるの？

向こうも

「なんでコイツがきてんだ？」
とか思ってたそう。

絶対思ってる。

「奈々、ちよつと・・・」

玲羅が奈々を連れてった。

しかも葛城にウィンクつき。

ええ???!!!!

どうしょ!

超気まずい・・・。

玲羅達が行った。

しばらく、私と葛城の間に沈黙が流れた。

切り出したのは、葛城の方だった。

「あ、あのさ・・・」

「・・・・・・?」

「俺、ロリコンとかそういうのじゃないから」
念を押すように言った。

あ、なんだ。

「・・・だから?」

私は冷淡な声で言ってたやつた。

葛城はム力つく。

「桐嶋・・・」

「玲羅達いるから・・・。

お邪魔しました・・・」

私は葛城の言葉を遮った。

葛城は、小さい声で

「メールするから寝るなよ」
とだけ言った。

私は心底驚いた。

「・・・うん」

それだけ言って、私は去った。

びっくり

怒っていた。

絶対怒ってた。

翌日の夜。

オレが母さんにこの話をしたら・・・。

「あはははは！海斗好きな子いたんだ」
笑い泣きしやがった。

「あははははは・・・おつかし」
ピンポン。

また微妙なタイミングでのチャイム。

「はい・・・あゝ！！いらっしやい」
誰だろう？

母さんの知り合いか？

入ってきたのは30後半くらいの大美人だった。
どことなく誰かに似ている気が・・・。

「先輩、お久しぶりです」

「もう～翠だったら～うふふ」

30後半同士の世間話で盛り上がっている。

「あら、海斗。」

この人は私の大学時代の後輩で、盛岡 翠よ」

「よろしくね、海斗君？」

「あ、はい」

美しい、というべきか。

若い頃もキレイだったんだろうな。
今も十分だけど。

「ま、それは旧姓だけだね」

「あ、そっか！

今はなんだっけ・・・」

「桐嶋ですよ」

桐嶋？！

「確か、海斗と同年の女の子がいたわよね」

「愛蝶のことですか？」

アゲハ？！

間違いない・・・。

この人は桐嶋のお母さんだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5942w/>

change・life

2012年1月10日22時47分発行